

「この子供」を受け入れる

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

「この子供」を受け入れる

ルカによる福音書 九章四六―四八節

沖村裕史

弟子たちの間に起った一つの論争、痴話喧嘩のような話が語られています。その話とは「自分たちのうちでだれが一番偉いか」といって「地位と名譽」を巡る議論でした。その様子を見ていた「イエスは彼らの心の内を見抜き」とあります。蔭に隠れて弟子たちが互いに言い争っていることを見抜かれたのでしょうか。いえ、これはもともと深く、「だれが一番偉いか」という弟子たちの争いの奥深くにある問題、どう思うかからこのような議論、争いが生じるのかをイエスが見抜かれて…ということ。見抜かれたイエスが今、何を語り教えようとするのか。意表を突かれるイエスの姿が描かれています。

「イエスは一人の子供の手を取って、御自分のそばに立たせて…」

『イエスはこの問題について弟子たちを教えるために、一人の子どもを、いわば教材として用いようとしている』と説明されることがあります。この子どもは、弟子たちに教えるための単なる例、単なる教材に過ぎないのでしょうか。そうでないでしょう。こんな一文があります。

「カファルナウムは静かなところでした。ときおり兵士たちが隊を組んで行進してい

くときの重苦しい静けさは別にしても、目の前のガリラヤ湖が大漁にわきたつときでさえ、どこか穏やかな静けさがありました。あの静けさにあまりそぐわなかったのが、こどもたちだったかもしれません。町の陰に、親を失ったこどもたちが何人か命をつないでいました。孤児となつた理由はさまざまです。兵士に殺されたもの、病に「家族を」奪われたもの、生きたまま別れ別れになったもの、貧しさゆえに生きながら捨てられたものもいました。わたしもまた、そのようなこどものひとりだったのです。」
(久世そらち師)

「戦災孤児」として描かれる子どもの姿は、当時の社会状況からすれば、大いにあり得ることです。決して絵空事ではありません。敗戦直後の浮浪児のことをご存知の方はよくお分かりになるはずです。この子どももカファルナウムの町の陰で、通りかかる旅人に施しを乞い、あるいは何か手作りのものや盗んだものを売って、その日のいのちの糧を稼いでいたのかも知れません。たまたま通りかかった一団の旅行者に纏わり付くようにして、その宿の中にまで入り込みます。しかし、そんな孤児の存在などまるで眼中に入らぬ様子で、弟子たちは誰が一番偉いかと議論をしています。

その時、イエスはその見知らぬ孤児の手を取り、マルコによれば、子どもを抱き上げます。先ほどの一文の続きによれば、イエスは「ばらばらと落ちかかる泥や汚れを払おうともせず」、その子どもを抱き上げ、

そして言われます。

「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」マルコでは「このような子供の一人を受け入れる者は」となっていました。「このような子供の一人」です。どんな子どもであれ、一人の子どもを受け入れるなら、それはわたしを受け入れることだ、そう読むことができます。いわば子どもは社会的弱者の代表、一例に過ぎません。しかしルカが描いているのは紛れもなく、イエスが抱いている「この子供」です。冠詞がついています。「ト・パイディオ」。冠詞がつくか否かで意味が全く変わります。「子供を受け入れる人はわたしを受け入れる」というのと、「この子供を受け入れる者はわたしを受け入れる」とでは全く違います。汗のにおいが鼻をつき、泥や垢がばらばら落ちるような「この子供」。食べ物をもらおうとつきまとう、痩せこけた「この子供」。戦争や災害で親を失い、家もなく路上で必死に生きている「この子供」。その時、その場所にいる、具体的な存在です。「この子供を受け入れる者は」とのイエスの言葉を、わたしたちは空想の中にほんやりと思ひ描くのではなく、割り引くことなくリアルに読み取り、「受け入れる」ことを求められています。

ここに「受け入れる」という言葉が繰り返されます。イエスを、神を「受け入れる」とは、「信じる」ということです。自分にとって最も大切な存在として信頼し、従っていくことです。そのことがこの子どもを受け入れることと結び合わされます。それは、子どもがそこにいることを許してやるのか、いてもいいが邪魔をせずおとなしくしている、ということではありません。弟子たちが軽んじ、無視したこの子どもをこそ、一人のかけがえのない存在、大切な仲間、

共に人生を歩む者として、それにふさわしい「地位と名譽」をもって受け入れなさい、ということ。一見、誰が一番偉いかという弟子たちの議論とは何の関係もないように思えるこの言葉によって、イエスはこの争いの背後にある根本的な問題性―与えられたいのちゆえにすべての者をかけがえのないものとしてくださる神の愛を見失ってしまふ、わたしたちの罪、神への叛逆の姿―をまざまざと暴かれます。その意味で、注目すべきは「わたしの名のために」という言葉です。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者」であって、一般論として「子供を受け入れる者」と言うのではありません。この子どもを受け入れるのは、「イエスの名のため」です。ここで語られていることは、倫理や道徳の問題ではありません。どんな人をも排除しない寛容な精神を持ちましようということでもありません。見つめるべきは、イエスがどのような方なのか、そのイエスに従っていくところにこそ、この子どもを受け入れる歩みが生まれるのだということ。ここに、二回目の受難予告に続いて、この話が語られていることの意味があります。「わたしの名のために」と言われるイエスとは、「人々の手に引き渡されようとして」いる「イエス」です。人の手に引き渡され、苦しみを受け、十字架につけられて殺される、そのイエスに従い、その弟子として歩むところに、イエスの名のためにこの子どもを受け入れるという歩みが与えられるのです。なぜか。その十字架の苦しみと死は、まさに神が受け入れたい罪人である「このわたしを受け入れてくださった」出来事だからです。

(二〇一八年九月三日、三位一体後第一七主日拝